

獣医師の就業環境の未来を考える

—すべての獣医師が働きやすい職場づくりに向けた取組 (XII)—

女性獣医師活躍推進委員会委員による連載の幕間に

栗本まさ子[†] (公社)日本獣医師会副会長)



このタイトルでの連載は、令和5年1月発行の第76巻1号から続けられている。女性獣医師だけでなく男性も含めたすべての獣医師がのびのびと活躍できる環境づくりのために取組を続けている女性獣医師活躍推進委員会の委員等に、順番にご執筆いただいていた。

女性獣医師活躍推進委員会（最初は女性獣医師支援特別委員会）の取組は平成25年から開始され、幅広い関係者の理解醸成を目的としたシンポジウムが、平成27年から毎年企画・開催されてきたが、最も理解醸成・意識改革を急ぎたい雇用主や管理職である昭和世代の男性の参加が多くはなかった。女性獣医師応援ポータルサイトにシンポジウムの動画を掲載し、活用を呼び掛けてみたりもしてきたが、やはり、より積極的に情報発信を繰り返すしかないだろうということになった。地方獣医師会や獣医大学での取組について日本獣医師会雑誌に連載し、昭和世代の男性だけでなく幅広い関係者に、また、学生さんや獣医師会を休会中の獣医師の方々にも関心を持っていただければ、との考えで続けられてきた。

この連載は今後も継続される予定だが、ほぼ一巡したところで、続編が始まる前の幕間に、地方獣医師会にご協力をお願いしている調査の結果などをもとにこれまで状況を振り返り、これからの課題や進め方などを少し考えてみたい。

女性役員の数

—増えると何がかわるのか？ そのための取組は必要か？

「女性役員がいない地方獣医師会は1名を、いる地方獣医師会は複数名を女性にする（2020年目標）」が提案されたのは2017年（平成29年）。その前年は女性役員がいない地方獣医師会が全体55のうち30、女性役員数は32名（役員全体の3%）だったが、「女性役員を30%

以上にする（2030年目標）」が設定された2019年（令和元年）には16地方獣医師会、68名（7%）となり、昨年（2023年）は6地方獣医師会、88名（9%）となった。また、この間に女性の副会長は1名から13名に増えた（図1と表）。

女性役員を増やすために会長推薦枠を設ける等の特別な取組をしている地方獣医師会は平成29年の13から令和元年に15、令和3年に20と増加したが、その後再び13まで減少している。地方獣医師会によって事情が大きく異なるため、一定の世代の女性が増えれば役員も自然に増えるので特に取組は必要ない、特別扱いすること

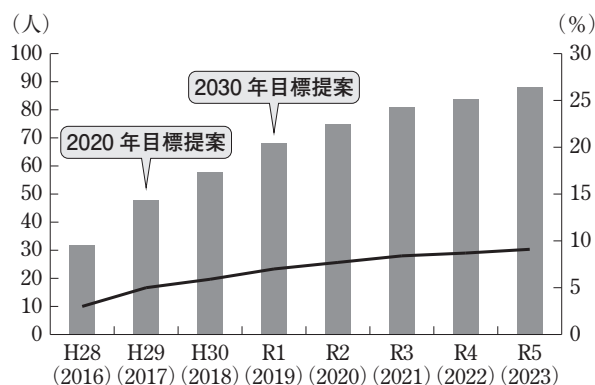


図1 女性役員数と役員総数に占める女性の割合の推移 (日本獣医師会調べ)
(■ 女性役員総数 (名) — 割合 (%))

表 女性役員数等の推移 (日本獣医師会調べ)

	平成28年 (2016)	令和元年 (2019)	令和5年 (2023)
女性役員数	32	68	88
(割合)	3%	7%	9%
女性役員がいない 地方獣医師会数	30	16	6
副会長	1	3	13

[†] 連絡責任者：栗本まさ子 (公社)日本獣医師会)

〒107-0062 港区南青山1-1-1 新青山ビル西館23階

☎ 03-3475-1601 FAX 03-3475-1604

E-mail: masakokuri1954@gmail.com

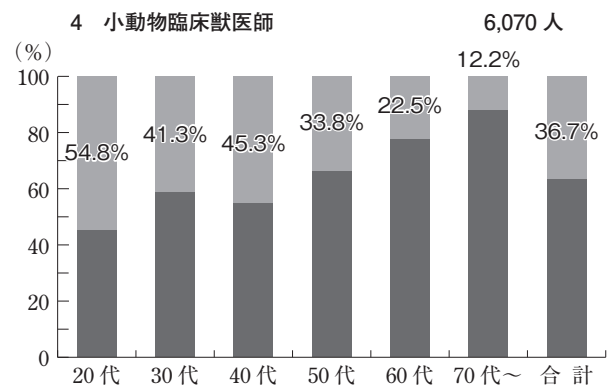
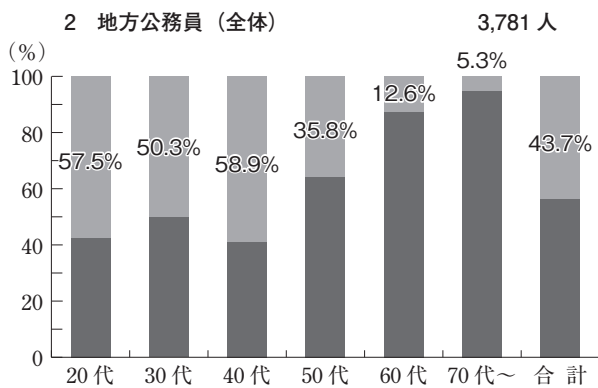
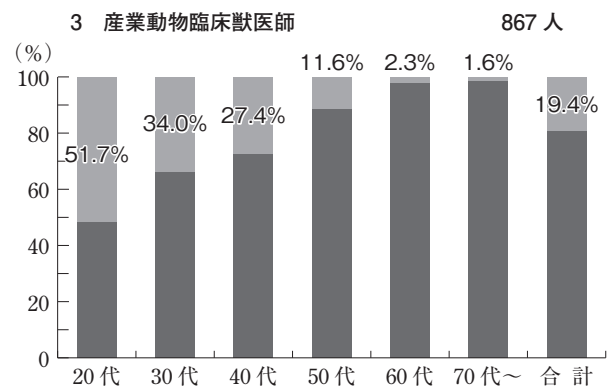
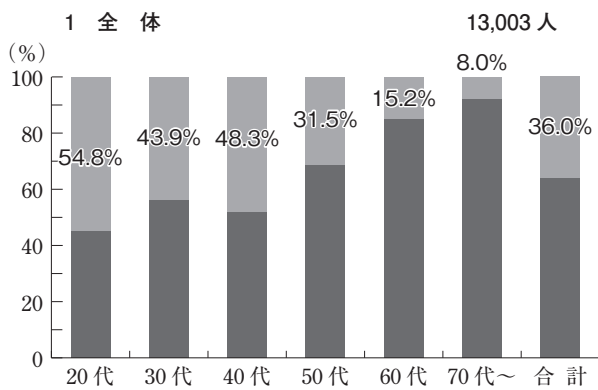


図2 獣医事に従事する女性獣医師の割合 (R4) (■ 女性 ■ 男性) (農林水産省調べ)

は不適切、無理に女性を増やす必要性を感じない等のお考えもある。女性獣医師の増加に伴い、職場の経営者、管理職等指導的立場に立つ世代の女性割合も増えてきた(図2)。地方獣医師会の職域ごとの部会や支部の部長、副部長等に就任している女性は、令和元年の3名から令和5年に34名に増え、うち13名が部長である。まだ女性役員のいない地方獣医師会で職域部会の女性部長等が就任しているところもあり、指導的な立場で活躍する女性獣医師は着実に増加している。それでもやはり、仕事と生活を両立させながらの獣医師会活動は負担が大きいこと等から積極的になりにくい。何らかの動機付け、後押しや支援が必要であると考えられている。現役を卒業した女性獣医師の活躍にも期待したい。

女性役員が増えると何がかわるのか? との質問を受けることがある。女性がひとりふたりではあまり変わらない。30%になれば、より自由に発言しやすく活動しやすくなり、雰囲気や環境が変わる。楽しそうに活躍している女性役員たちを見て、男性より大幅に加入率が低い女性や若い会員が増えることも期待している。2030年を待たずに目標が達成されることが望まれる。

具体的な取組 —残された懸案はまだ多い

女性獣医師の人数を把握している地方獣医師会は13、就業していない女性獣医師を把握する取組をしている地方獣医師会は3、女性会員を増やすための取組をしてい

る地方獣医師会は6と少なく、この数は令和元年からほとんど変わっていない。

一方、育休等の際の会費減免制度を設けている地方獣医師会は、令和元年の6から18に増加した。いったん職場を離れても獣医師会は退会せずに会員であり続ける女性獣医師が増えることが期待される。離職中の獣医師と連絡を取り合えることが復職支援等のために必要であり、情報交換会、相談会等を開催している地方獣医師会もある。

女性獣医師応援ポータルサイトは、技術的な問題のある一部を除き地方獣医師会のホームページにバナーが掲載されている。ご要望やご意見を踏まえて逐次更新されているので活用していただき、ご要望等をお聞かせいただきたい。地方獣医師会の要望が強い求人サイト(人材募集ページ)の改善については、自由度の高い働き方が可能か、研修制度があるか等のきめ細かい条件で検索できるようにする改善が今年3月に行われた。動物病院等における自由度の高い働き方等の導入が進み、人材募集掲載申込フォームへのきめ細かい情報の入力が増えて、よりマッチングしやすいサイトとして運用されることが望まれる。同様に要望が強い人材バンクについては、2つの地方獣医師会で設置、運用されているが、日本獣医師会では設置が困難とされている。職場に迷惑をかけず安心して休暇を取得するために「育休中は代替獣医師が来てくれるのがあたりまえ」にする必要があり、そのた

めには人材バンクが必要であると、女性獣医師活躍推進委員会では当初から指摘されていた。日本獣医師会での設置の必要性や可能性について、改めて検討が必要かもしれない。

女性獣医師のための相談窓口も、設置している地方獣医師会が1つ増えたもののまだ2つの地方獣医師会のみであり、日本獣医師会の相談受付体制も十分とは言えない。畜ガールズ（産業動物に興味のある女性の会）のご厚意で相談窓口にリンクを貼らせていただいているが、引き続き検討が必要である。

理解醸成・意識改革

一昭和の世代が最も対応を急ぐべき

若い女性獣医師が男性上司や先輩のパワハラ、セクハラを理由に退職する実態がまだある、との情報に最近接した。獣医師の職場にもまだ残っていた。

今年、某県の町長（70歳代男性）が、女性職員へのセクハラを理由に辞職した会見で、体に触れたのはしっかり仕事をしてくれてありがとうという気持ちからだったが、今はそれがアウトだということは理解している、と述べていた。昭和の時代はそれでよかったが世の中がすっかり変わってしまっていたということで、なんとなく気の毒なような気もしたが、そんなふう感じた人は意識改革が必要である。

しばらく前に、仕事ぶりや容姿についての政治家（80歳代男性）の発言に対する女性大臣の対応も話題になった。どんな意見もありがたい、とした対応は、冷静で立派だと感じたが、これには批判が続出した。不適切なことを言われてもがまんして受け流さなければいけない、という誤ったメッセージを与えてしまった、とされた。つらい思いをしていてもなかなか声を上げられずにいる女性たちはまだ多くいるのだから、リーダーたる大臣にはもっとしっかり抗議してもらいたかった、というのだ。世の中が大きく変わっている。たしかに私たち昭和の女性たちは相当がまんしてきた。そのためすっかり感覚が鈍ってしまっているので注意が必要であるが、昭和の男性たちはさらに気を引き締めて意識改革を急ぐ必要があるようだ。

その後も、セクハラ、パワハラの問題で辞職に追い込まれる首長は続いている。そして、某県の町では、男性中心の町政から「令和の価値観」への転換を訴えた同町初の女性町長が誕生した。これを機に念のため、ご自身の言動やそれぞれの職場を点検してみていただきたい。

仕事を続けやすい環境づくり

一若者の仕事観が大きく変わっている

このことの重要性は女性獣医師活躍推進委員会でも当初から取り上げられ、短時間勤務等勤務形態の多様化、

出産・育児休暇が取りやすい環境づくりの参考事例をサイトに紹介するなど、できることから対応が進められてきた。ところが数年前から、国でも自治体でもNOSAIでも、男女の別なく辞める獣医師が増えていることが深刻化している。

そして、若者全体の仕事観が変わって転職が増えたことが大きく取り上げられるようになった。働き方改革関連法が施行され労働環境は改善されたはずなのに、すぐ辞めてしまう若者が増えているというのだ。厚労省が発表した大卒社員（大手企業）の入社3年以内の離職は、2001年は5人に1人だったが、2021年は4人に1人に増加している。

その理由は、キャリア不安、と言われている。もっとスキルや経験を身に着けたい、成長実感を得たい、転職して経験を積みたいと考えて、今の仕事を辞めて転職する。転職サイトがたくさんあることも一因とされる。若い人たちは先輩たちが幸せそうかどうかをよく見ているし、理想の働き方のイメージを持っている。新しいことに挑戦できるか、独立や起業ができるか、プライベートを重視できるか、などをよく見ているとのことだ。そうした若者たちが辞めずに定着してくれるように、変わらなければならないのは職場であり、昭和の私たちの世代。特に獣医師の仕事は、卒業してすぐできる仕事ばかりではない。それぞれの職場で経験を積むことによって人を育てる必要があり、辞めずに定着してもらうことが特に求められる。このことに関しては、第77巻4号に掲載されている上松瑞穂氏の実際に成果を上げている対策の報告が参考になる。

仕事も生活も一後悔しないように、持続可能に

昭和の私たちはそれが当たり前だったが、ほんとうによく働いたと思う。やっぱり女はだめだ！と言われないうちにひたすら頑張って、家庭や子育てや多くのことを犠牲にして仕事をした。先日、昔のドラマの再放送で、仕事に夢中でほんとにバカだった、人生は長いけれど子どもと一緒に過ごせる時間はすごく短いことによく気付いたと、子どもを実家の母親に任せきりで仕事してきた女性が言っていた。ほんとうにそのとおりであり、そのことに気付いてもいなかった。

今は、育休も介護休暇も制度がしっかり整い、男性の育休取得も進められているが、それでもやはり、育児や介護で離職したり働き方を変えたりすることになるのは女性が多い。そして、男女の賃金格差は主要7カ国で最大、OECD平均の約2倍もある。このことの要因として、「家事や育児は女性、仕事は男性」という性別役割分担意識が日本は諸外国に比べて根強く残っていること、非正規で仕事する女性が多いこと、キャリアが短く管理職や役員になる人が少ないこと等があげられる。

以前の実態調査では対策の遅れが目立った小動物診療分野は、非正規で働く方も多い。改善は進んだだろうか。前回の調査からちょうど10年経ったのもう一度実施し、地方獣医師会のご協力をいただく調査にもより積極的にご意見、ご提案等をご記入いただき、これまで進

めてきた取組を検証し、次のステップに進めたい。

若い獣医師も女性も男性も、長く気持ちよく働ける職場づくりを、みんなで考えていくことが今、ほんとうに急がれている。そのためのご提案やご要望をお待ちしている。